

日時：平成 27 年 1 月 9 日（火）18：30～20：45

会場：練馬区役所 本庁舎 19 階 1902 会議室

1 常務理事挨拶

日頃より、地域福祉活動計画の策定についてはご協力いただき感謝申し上げます。今年もよろしく願う。

地域福祉活動計画は本来であれば、3 月までに策定の予定となっておりますが、新たな区長のもと練馬区の各計画のスケジュールが見直され、練馬区の地域福祉計画においても、12 月の策定となっている。それに伴う形で、当会の地域福祉活動計画についても 12 月の策定を目指しているところである。また本来であれば委員の方々の任期も今年 3 月ということになっているが、計画の継続性ということもあり何卒策定に向けて引き続きご協力のほどよろしく願う。

2 配布資料確認

3 小地域福祉活動についてのワークショップ報告

資料 1 に基づき説明

【質問・意見交換】

- 委員長 ワークショップのまとめの中で今日的な地域課題に対応するとあるが、具体的な課題は出なかったか？
整理したものを見る限りでは、地域に今どのような課題があるかというよりも、どのように対応するかということが書かれている。
- 職員 課題というよりも取組みの中から第 4 次計画にさらに展開できること、広げていくということへの意見をいただいたので、このような形で整理をした。
- 委員長 取り組んだことの中から広げていくということであったが、ボランティア同士の繋がりなどは上の日常的なつながりを深めるという方に入ってもいいのではないかな。
- 職員 整理していく中で明確に分類できないものもあるとは感じている。
- 委員長 全体的に、「どうするか」はあるが「何を」ということがない。「どうする」ということは何か課題があるから「そうしたい」ということになるわけなので、もう少しこれから 5 年くらいの練馬でどのような課題があって今何をしなければならないということを導きだして計画として反映していくべきなのではないか。これからの話になるかもしれないが姿勢だけははっきりしている。
- 委員 ワークショップでは、社協の職員が多かったので、広く地域を将来的に話し合うというよりも、今までの実績や取り組んできたことについての意見が多かった。外の問題点をみんなで話し合う時間はあまりなかった。
- 委員 同じようなことになるが、小地域福祉活動に社協がどのように取り組んできたかということから話し合いが始まった。そこからその意味を掘りおこさなければならない。ワークショップであがった意見をもとに、住民がどう育ち、社協の活動にどのように繋がっていくかを考え、具体的に社協が何をすべきかをあげていく方がいいのではないかな。
- 委員 ワークショップの目的はそもそも何だったのか。
- 職員 第 3 次計画をどのように進めてきて、どう取り組んできたかを振り返り、第 4 次計画にどのようにその取組みを発展していけるかを考える趣旨でワークショップを行った。
- 委員 どのように取り組んできたかがテーマの中心だったということか。
- 職員 さらにディスカッションする中で 4 次計画の策定に繋げていけるように考えていた。
- 職員 委員の提案を確認させていただきたい。
- 委員 社協が「取り組んできて良かったね」ということから、もう少し掘り起こしてそれが住民の気づきや住民が育ち合うことによって、どのようにして繋がったのかを分析することが必要。

その入口としてワークショップの意義はある。

主語は社協ということではなく「住民がどう育つ」と置き換えて考えることが大事なのではないか。

職員 今回のワークショップはそこまでいたっていない。社会福祉協議会としての第3次活動計画においてどのような取組みをしたかワークショップで策定委員の皆さんと共有したかった。共有したうえでどのような効果、影響をおよぼしたか結果を共有したかった。さらに委員のおっしゃるように4次計画にどう繋げてどのように進めていくかの方向性をワークショップという形で確認したかった。職員が多い環境でのワークショップであったが社協職員も育つて良かったという思いもある。ワークショップの分析を、第4次計画に向けた資料として考えていければいいと考えているが、よろしいでしょうか。

委員長 合わせて言えば、何を、ということと誰が、ということはきちんとしておく必要がある。主語をどうするかもう少し整理することが必要。どのようなスタンスでどのような視点でということを確認にする。おのずと第3次計画でやったことが引き継がれていくと思うし、区がやってきたこと、新しい状況に対応しなければいけない課題もあるだろうし、そういうことをしっかり具体的に入れていかないとならない。そうしないと、具体的に実施する施策、計画とはならない。そういう意味では誰が何をということを確認にしていける必要がある。第4次の目玉になるであろう協働推進というよいネーミングを委員からご提案いただいた。

4 (仮称) 地域福祉協働推進員の説明 資料2に基づき説明

委員長 地域福祉協働推進員という名称は「協働で推進」が入っていい名称だと思う。

【質問・意見交換】

委員長 ご意見をいただいた二人の委員にお伺いする。

副委員長 協働推進委員はとてもわかりやすい。漢字を見ればよくわかるが、最初の協力員より断然いいと思う。例えばネリーという名称を入れるとか、広めるために愛称はとても大事だと思う。

委員 進めるにあたってどういう説明をするのか。こちらからアイデアを言うのではなく参加された人に考えてもらうのはいいが、例えば「こんなまちにしたい」など、推進委員としてどのように取り組み、どのような成果が期待できるのか、参加する方もよくわからないということにならないか。それともハッキリしていなくてもまずはなにか行動して、少しでも住民同士のつながりが練馬区に出来ればいいのか、もう少し大きな目標があった方がいいのか、その部分は少し私もモヤモヤしているところはある。

委員長 評価スケールはどのように考えているのか。

職員 スケール、評価という部分ではまだ物差しをもってどのように評価するかは具体的には検討していない。委員にも参加していただきリサーチャーについての話し合いを持ったが、「こういうまちにしましょう」という大きなテーマでなくても、小さい懇談会から始めてもよいと考えている。懇談会の参加者から、日常の身近なことでこうなったらいいなというようないろいろな意見が欲しい。こんなまちにしたいということを意見交換しながら、その目標に向け、少しずつでも取り組んでいければよいと思う。協働推進委員なのでそれぞれひとり一人が取り組み、社協としてどんな活動ができるか一緒に考えていければと考えている。取り組んで活動する中で、また話し合い、良くなったことを積み重ねて、実感したりすることも評価であると考えている。

委員 小規模からスタートとのことだが、練馬区全体を考えるとどのくらいの規模を考えているのか。相当やる必要があるのかとも思うが。

職員 社協の会員の方にまずは周知をさせていただくことを考えている。広く周知はしていきたいが、はじめから全区的に懇談会を持つということは正直難しいと持っているので、順次でき

るところから始めていきたいというのが今の段階。

委員 今までやってきたモデル地区、民生委員、地域で活発に活動している組織の関係者などは今まで接触が多かったと思うが、そのような人たちは当然みんな入るのか。地域で活動している民生委員は全員が対象なのか。何人なのか、その点もちよっと問題はあ

職員 きちんとした会議体というより、少人数での懇談会をイメージしている。最初は、声をかけやすい方に呼びかけるようになると思うが、話し合いが広がっていく中で「このまちをこういうふうにしようよ」というテーマが決まってくると思う。テーマがすぐ決まらないこともあるし、テーマにひかれて集まってくる方もいると思う。ガチッとしたものではなくゆるやかで興味のある方が参加して広がっていただければと考えてはいる。

職員 委員はどのようなイメージをもっているのか。どういうところから声かけを行うか。例えば委員のシニアクラブなどもそうだと思う。

委員 ある程度は選択的にやっていくということか。

職員 シニアクラブは、いろいろなことを皆さんが思っていると思う。そういうお話を社協がうかがって一緒に、考えのまとまっているところから着手して繋がっていくことが大事。協働で行ってきたい。

委員長 実際は計画書を作るわけだから、単年度ごとに一応何か所とか少なくとも次年度くらいは、どこどこのエリアとかは見すえて決めていかないと計画と言えないのではないかと。「頑張るぞ」だけでは計画にならない。どこから始めるとか、計画が出来る段階では5年間で何か所という表示位はしないといけない。決意の計画ではないのでその点は注意する必要がある。

職員 それが評価につながるということか。

委員長 きちんと決めておけば評価はしやすい。ここでやるつもりだったが出来なかった。こうやろうと思っていたが出来なかった等。

委員 個々の問題が記載されているからいい。私は町会長の立場から、今後町会はどうするかということを考えている。少子高齢化の問題や子どもの預かり場所、孤独死の問題など、目的に大きな柱を示していくことが必要。「託児所がなくて困る」という課題に町会で何が出来るか？昔は、おじいさんおばあさんが役割担っていたことを、ボランティアで出来ないかなどと私は漠然と考えている。出来る出来ないは別として目的を絞っていくことで繋がっていけばいいのではないかと。そうすることで形が見えてくるはず。目的がないと進まない。

町会の皆さんに構想を打ち明けて「こういうことをやりたい」という目的やいくつか柱を示すことが必要なのではないか。協働推進委員についても触媒の役割を務めていけばいいと私は考えている。触媒の役割は誰もがわかるような大義を示してみんながその気になるように地域の人に理解してもらうことが必要。

委員長 地域懇談会ではできるだけ共通のテーマ。町会の人、町会に入っていないひと、社協の人たちがいつも世話するのではないほうがいい。私が20年前ごろ、水俣でやった時もそうだったが、2回目3回目からは自分たちの町は自分たちで、地域の人たちも育っていくという気になっていくことが必要。いつも社協がおぜん立てするのではなく自分たちの問題は自分たちで考える仕組みが必要。もちろん常設化して特定のテーマもやるけど、地域の独自のテーマもやればいい。「やるぞ、やるぞ」だけではなくてそういうことも計画にあげていかないとならない。

委員 理解しやすいテーマを掲げれば、あとは関連していろいろ出てくるだろうしその方がわかりやすい。みんながその気になるように仕向けることが大切。

委員 イメージの中で第4次の計画の大きな「気づき合う」「育ちあう」というテーマに協働推進委員がどのように関わっていくのかももう少し整理してどこに設定するかははっきりわかるといい。住民同士が気づいたり、育ったりすることを手助けして欲しいということを狙っているのか、協働推進委員が「気づき合い」「育ち合う」のかそこら辺はやりながら整理していく方法もあると思うが。

職員 様々と設定した。推進委員自体が気づく場合もあるし、気づいてもらう側にもあると思うし、特に設定しているわけではない。

- 委員 気づき合う、育ち合うところにつながっていくということであればもう少しはっきりわかる
といい。
- 職員 だいたい推進委員というと、民生委員とか地域でガッツリ活動している人がイメージにあ
がることが多いが、そういう方々だけではなくて、そういうつもりでなくても地域を作っ
ている人もいる。それぞれいろいろな立場、例えば、何かやりたい子育て中のお母さんなど
も当てはまる。それぞれの立場で出来ること、やれることからできればいいかなと。そう
いう人も全部いろいろな人を巻き込んで一緒にやっていければと考えている。レベルと
かの問題ではなくその人の出来ることをやることを目指す。
- 委員長 ある問題に関しては、ガッツリ活動している人が、他の問題には気づいていないこ
ともある。
委員 日本はこれから自助共助が大事になると思う。特に自助が一番大事。自分たちで良
くしていく仕組みが大事。そういう考え方を持つように働きかけることも必要。
- 職員 その危機感をもったほうがいい。
- 委員 東日本大震災のようなことが起こったことにより大変だとみんな考えるようになった。
委員 社協だけでは大変。言い方を変えればみんなで自覚を持つということが大切。
職員 大震災の時、やっぱり大変だとみんな思った。そのことで、改めて自助の必要性を
認識したのではないかな。
- 委員 自覚しないといけないが難しいことでもある。
- 職員 気がついたら何かしなければならぬという考えはあると思う。大震災の時も何かし
なければとみんなが思ったことと同じだと思う。
- 委員 大震災のように目の前で見えればみんな考えると思うが、日常で自助を意識する
のは難しいのではないかな。
- 職員 確かに委員は常に危機感もち行動されている。みなさんにも危機感を持ってもら
うために委員長に講師をお願いしシンポジウムを行った。
- 委員 少子高齢化は重大な問題だと思う。マンツーマンで支えることは無理な話である。
委員長 自覚するということが大切。自覚しないでやらされるということも良くない。東
日本大震災のように目の前で大きな大変なことが起これば分かり易いが、少子高齢化は
真綿で首をしめるようにジワジワ締め付けていくような問題であり、自分に関係ないと
見過ごしている若い人などが考えていくことが必要。特に若い人はリアルに感じるこ
とが出来ないで人ごとだと思っている。高齢者が元気でいてくれたら、自分たちの
所得を回さなくてもいいわけなので、それにどう気づいてどう行動するか。若い人
にとって少子高齢化はどのような問題なのか。介護が大変だということだけではなく
て、世の中のシステムを考える視点を入れなければならない。例えば年金の問題も
積み立て方式になれば若い人がもう少し楽になるかもしれないなど、若い人が
気づいて考えられるようにならないといけない。皆さん、協働推進委員の理念
について異論は無いかもしれないが、もう少し具体的で緻密な計画が必要である。

5 第4次地域福祉活動計画構成案

資料3に基づき説明

【質問・意見交換】

- 委員 この前のMXテレビも良かったが、分かり易く映像化することも必要。
- 職員 細かく書くということも大切であるが、シンプルで分かり易く作ることが策定委員
会でいただいたご意見である。どのように評価していくかもきちんと書かなくては
ならない。
- 委員長 社協の運営は理事会に議決権、決定権がある。理事や評議員にどのような役割
を持ってもらうか。そのためにはどのようにその気になってもらえるようになるのか。
方針を考えないと
ならない。
- 職員 ここには理事が2人もいらっしゃるの、ぜひなっただきたい。
- 委員 まずは、理事である自分たちからということだな。
- 副委員長 理事も推進委員になってほしい。評議員、民生委員にもぜひ担って
いただきたい。

- 委員 理事や評議員や民生委員が引っ張っていくということではなく、住民の声を聴く、声なき声を聴く側でないと上手くいかないと思う。今まで聞こえなかった声を拾える会として進めていくことが必要で理事が先頭に立ってひっぱっていくというのは違うのではないかなと思う。
- 委員 理事や評議員はひっぱるということではなくて意見を聴ける立場であるということだと思う。
- 委員 4次計画はどうやっていくのか、どう手伝ってもらいたいかな認識を深めることが必要。
- 委員長 先頭になってひっぱっていくというよりも、理事は議決権を持っている当事者であり、住民の声を聴くこと、それを社協の運営に活かしていくことが役割であるという認識をもつということが重要である。
- 委員 社協のやっていることが今の時代に必要だということを、相手が興味をもち聞いてくれるように広く知ってもらうことが必要。
- 委員 いろいろ話をきいていくと、住民懇談会は凄く大事だと思う。どういう風に皆さんが参加できるかということ、どのように巻き込んでいくかということが大切で、そのためのアプローチが必要。今まで社協に関わりがなかった人を取り込んでいくことはなかなか難しく大変だけれどそこにしっかり取り組んでいくことが大事。評価の部分では今まではどちらかといえば量的評価の部分だけを見がちだった。例えば住民懇談会を例にとれば、何人参加したとか、何回開催したか、時間はどのくらいだったかなどはある意味計りやすくわかりやすいが、質的評価を入れていかないと厳しい。参加して話し合う前と後でどう変わったか、ちょっと面倒ではあるがインタビューなど丁寧にきちんと質的部分の評価をしていくような取り組みが必要。
- 委員長 それが成果だったり効果だったり実感だったりという評価になる。
- 構成案は具体的なものにしていくまでにまだ時間的にはゆとりがある。協働推進委員の件や、地域福祉計画との連携や生活困窮者の自立支援等の取り組みが具体化していくと構成案にも肉づけしていくことになる。
- 職員 適宜、肉付けしたものをお示しすることになる。

6 (仮称) 区政運営の新しいビジョン (素案) について

- 区職員 現在、ビジョンを策定中であり、素案が完成した時点でパブリックコメントを行い、区民の意見を聞く予定である。
- 委員 素案は防災についても触れている。町内会長として災害者要援護者名簿も預かっており、また、区が行う大震災を想定した災害訓練にも参加している。
- 先日、動物と共に避難を行う災害訓練を行ったが企画の意図を確認したい。
- 区職員 後日、担当者に確認して返答をする。
- 委員 了承した。
- (平成 27 年 1 月 14 日 練馬区健康部生活衛生課より回答済み)

7 『気付き“あい”のあるまち』の取り組みについて

- 区職員 出張所を見守りの拠点としてモデル事業を社協と連携して取り組んでいく。

8 まとめ

- 副委員長 2次計画・3次計画から関わっている。だんだん地域住民の力がほんとうに必要なということが強くなってきている。民生委員や地域で活動する人達だけが中心となるのではなく、今まであまり関わっていなかった人や、いろいろな立場の人が考えていくことが大事。やってもらっているということではなく、自分たちが主体になってやらなければならないという気運を高めていくためにも誰もが協働推進員になって、今までやってもらっていた人達も一緒になって、例えば理事や評議員の人も白百合の利用者の人も同じような立場で話し合えるようになるといい。そして量的なものだけではなく質的なものをみていくことが必要なのだと思う。
- 委員長 職員がだんだん熱心になってきているということは、成功経験があって、やっていくなかで

変わってきた体験を実感して自信が出てきてもっとやっ払いこうという気持ちになっているからだと思う。その体験を区民の人たちに味わってもらうこと。例えば有名なところで言えば、神戸市の長田区真野地区、あるいは水俣などは、自分たちが動くことで良いまちになっていくという経験を積み重ねて行って、その結果自然と後継者が出てきて、まちづくりの土台になっている。

阪神淡路大震災の時も救援物資が他の区はなかなか手配が出来なくても、真野地区は独自のルートで手配できていたりしていた。また日頃からケミカルシューズの工場と町内会は防災訓練などを行っていたため、結果的に火災の広がった長田区の中においても被害は少なかった。都市部でできないということはない。区民が興味を持って一緒に参加していけるような企画をもっていくことが必要である。

9 次回の日程について

【日時】未定

【場所】未定